

保健師 最前線

母がくれた言葉「ありのまま」

大山崎町

ながい さなえ
永井 沙苗 さん



愛媛県生まれだが10歳まで大山崎町の隣の大府島本町に住んでいた。一時期、母親は大山崎町で看護師をしていたという。大学の看護学科に入ってすぐ、映像で保健師の仕事を見た時に「看護師よりも、地域のひとと身近に接する保健師の仕事にぜひ心がどきどきした」と話す。

保健師になって3年目である。乳児健診・離乳教室などの母子保健、がん検診、赤ちゃんや検診の結果など注意の必要な人への家庭訪問（地区担当制）など業務は幅広い。

交通の便がよい大山崎町では、年間120〜140人の赤ちゃんが生まれるといい、「よく言われる少子化という印象はあまりしない」とか。「ただ、子育てなどで心配があったら、昔だったら周りの人にいろんな相談ができたんですが、今は地域でのコミュニケーションが弱くなっているうえに、自分から周囲の人に話しかけていけないお母さんが目立ってきた感じも…」と話す。

がん検診を受診しない人に、いかに受診してもらうかも大きな課題であ

る。昨年は、比較的受診率のいい乳がんと、バリウムを飲むことに抵抗があり受診率の悪い胃がんの検診をセツトにするなど、住民の健康を守るため先輩の保健師とともにあの手この手で工夫をこらしている。

保健師の仕事に最初は、無力感に襲われたという。「病気の処置など患者さんと直接かわかれる看護師と違い、保健師は住民の方の話をただ聞き見守ることしかできないって…」。でも、今は、「じっくりと話を聞くことの積み重ねが何よりも大切だと思えるようになった」。

3歳からやっているクラシックバレエをまた始めた。ストレス解消法でもあり、自分を見つめなおすためでもある。

いま一番好きな言葉がある。『ありのまま』

「仕事でしんどい時やつらい時は、我慢しなくても、しんどい、つらいと言ってもいいのよ」。今は愛媛でケアマネジャーをしている母親が人生の先輩として娘に贈った言葉だ。